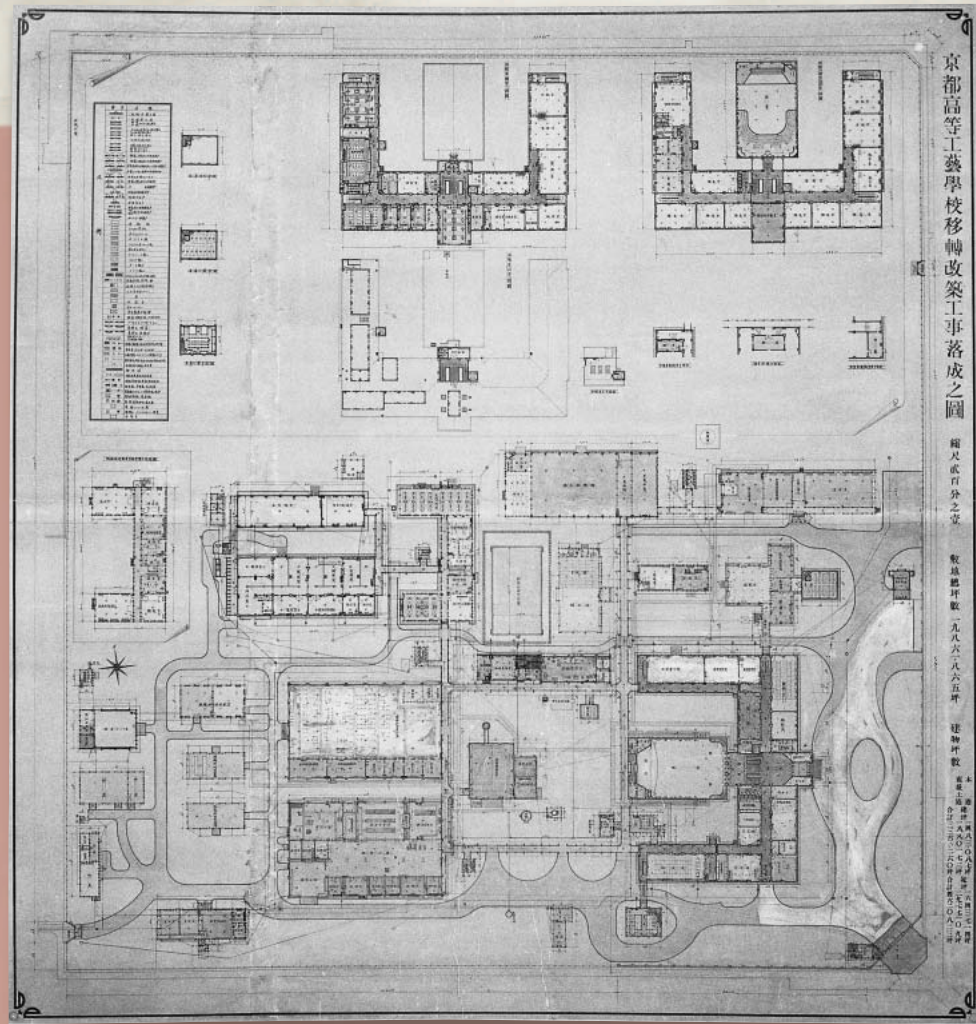


美術工芸資料館収蔵品紹介



京都高等工芸学校移転改築工事落成元図

蔵品を巡って-資料館蔵品紹介-1

KIT-NEWSに美術工芸資料館が顔を出すのはこれ
がはじめてである。勿論建物と言うよりも、施設としての美術工芸資料館あるいは活動する教育研究機関としての美術工芸資料館が採り上げられた事は嘗てあったであろうが、資料詰まり館蔵品を巡る話をするのはこれが初めてで、今回を含めて数回おつき合い願いたい。さて初回に光を当てるのは、《京都高等工芸学校移転改築工事落成之図》である。

京都高等工芸学校、そう、ついこの間百周年を迎えた

ばかりの現京都工芸繊維大学工芸学部の前身であり、第三高等工業学校を目して明治35(1902)年に開設した国の直轄学校なのであった。あれこれの経緯は措くとして、とにかく今で言う左京区吉田の地に構えられた学校である。吉田と言っても広い。日伊会館、人文科学研究所、関西日仏学館、京都大学西部講堂、同体育館あたりの一角である。「工織大まりこうじ会館(国際交流会館)」があるのは往時あのあたりに高等工芸学校が存在した事の名残り以外の何ものでもない。



2号館(工芸本館)正面玄関



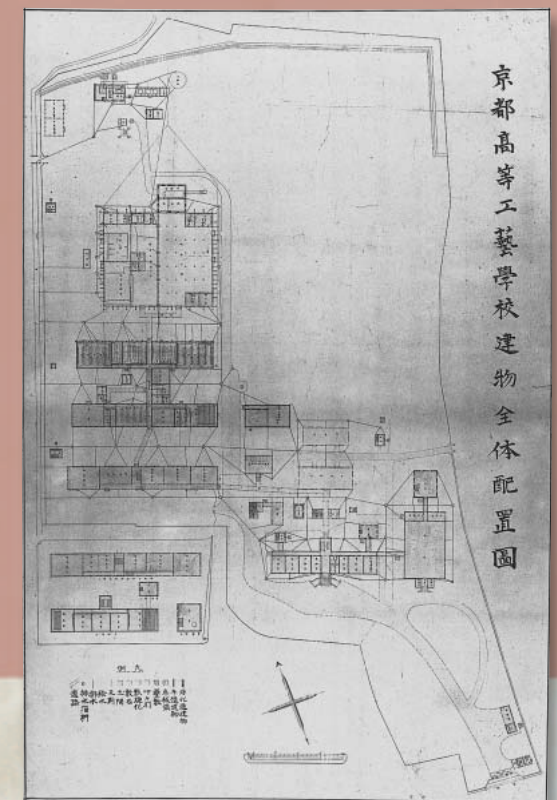
現在の2号館(工芸本館)

ところで、吉田の学舎が手狭になったのか、それとも京都大学が手狭になって、校地を拡張するために余儀なく高等工芸学校は移転することになった。詳しい処は知らないが、とにかく、当時で言う「愛宕郡松ヶ崎村」への引越しである。それで、新校舎が造られることになり、その設計図が今回採り上げる主たる資料である。この図には平面図だけで、立面図も断面図は描かれていない。それらが別に作成された形跡もない。おそらく本省関係者へのプレゼンテーション用のものと想像する。従って着彩の理由も納得できると言うものである。昭和5、6年の話ではある。

図面に読む通り、京都高等工芸学校発足当時の色染科、機織科、図案科用の教室や、それらの実習工場が立ち並び、ひととき目を惹くのが煙突である。実習工場は全て取り壊されて、今の4、5以下11号館に、図書館(或いは図書室)はセンター・ホールに替わり、そして道場と色染料用水溜(プール)のところに美術工芸資料館が建っている。残っているのは工芸本館(2号館)とその南側の、(やや南側へ移設一言葉通り、建物ごと南へ約5メートル程移動された)倉庫だけが現存するばかりとなった。戦後昭和40年代に北野にあった本部が東部校内に、繊維学部が西部校内に移って来て、さらに施設の充実を重ね、今の大学の姿を整えてきたのである。たった一枚の図絵が学校の歴史を緋かせる契機になることは、よくあることではあろうが、茲処にもそ

れが厳としてあることを改めて識ることになるのである。

近々「工芸本館」は京都市文化財建造物の指定を受けると巷間ささやかれているが、文化財としての建造物、そういった環境を「学び舎」として持っていることを我々は誇りとしても良い筈である。(美術工芸資料館 館長 竹内次男)



京都高等工芸学校建物全体配置図